福島県建築設計協同組合 令和6年度 木造施設視察研修会報告書

日 程: 令和6年11月30日~12月2日(2泊3日)

参加者:30名

明石 茂樹/(株)明石設計事務所 大波 慶行/(有)イガラシ建築設計室 佐藤 孝夫/(株)内田建築設計事務所 大塚 祥平/(有)大野建築設計事務所 中山 武徳/(株)中山建築研究所 安藤 正道/(有)フォルム建築計画 鈴木 宏幸/(株)杜設計 斉藤 魁人/(株)杜設計 濱尾 博文/AUM(株) 長島 周/AUM(株) 阿部 光輝/AUM(株) 新沢 直樹/(株)共立建築設計事務所 川村 慧/(株) 共立建築設計事務所 飛木 佳奈/(株)土田建築設計事務所 根本 学/(株)水上設計 渡邊 謙/(株)齋藤建築設計事務所 鈴木 聖志/(株)鈴木伸幸建築事務所 高桑 正晴/(株)タック設計 渡辺 道直/(株)渡辺建築設計事務所 逸見 啓明/(有)辺見設計 白井 武男/(株)白井設計 滑田 崇志/(株)はりゅうウッドスタジオ 斉藤 光/(株)はりゅうウッドスタジオ 和順 新/(株)はりゅうウッドスタジオ 平子 恵俊/(株)永山建築設計事務所 吉田 圭子/(株)永山建築設計事務所 矢吹 大/(株) 邑建築事務所 村井 弘道/(一財)ふくしま建築住宅センター 佐々木孝男/組合事務局 中島 壽一/組合事務局



視察目的: 中大規模の木造建築物や地域産業の活性化に向けた取組みを視察

国においては令和3年10月に「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律(公共 建築物等木材利用促進法)」が「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利 用の促進に関する法律(都市(まち)の木造化推進法)」へと改正されていく中で、福島県では中 大規模建築物の木造化推進を目的に令和5年度に「ふくしま木造化・木質化建築ガイドライン」 が作成されるなど、中大規模木造建築物の動きが顕在化していることなどを踏まえ、令和4年度 から木造施設視察研修会を実施している。

3 年目となる今回は、九州地方の熊本県阿蘇を中心に周辺に点在する中大規模木造建築物や木 造施設温泉街の活性化に向けた取組みなどを見て回ることとした。

参加者は組合員27名(県北8名、県中7名、県南5名、会津4名、いわき3名)と民間指定確 認検査機関である(一財)ふくしま建築住宅センター理事長にも木架構の構造審査の視点から参 加いただいた。事務局随行2名を含め30名での視察研修(2泊3日)となった。

| 1 | 次 | |
|---|----|----------------------|
| | 1. | 研修概要 |
| | | 事 務 局·······P 3~10 |
| | | |
| | 2. | 研修報告 |
| | | 報告1:大波 慶行····· |
| | | 報告2:斉藤 魁人·····P15~19 |
| | | 報告3:逸見 啓明·····P20~23 |
| | | |
| | 2 | T |



飛行機から見えた富士山の雪景色



視察はバス移動

1. 研修概要

〇2024.11.30 (土)

(羽田空港→熊本空港→神水公衆浴場→八代市市立民俗伝統芸能伝承館→八代市内ホテル泊)

当日は9:40羽田空港第2ターミナル集合とした。10:35 に羽田空港を出発し12:35 に熊本空港に到着した。その後、貸切バスで熊本市内に移動し、13:30 から最初の目的地である熊本市中央区の「神水公衆浴場」を視察した。あいにく施主で設計者の黒岩裕樹氏(熊本大学准教授)は不在であったが共同設計者の黒岩ヒロ子氏(黒岩構造設計事ム所:代表)に施設内を案内いただいた。1階を公衆浴場とした2階建て併用住宅としている本施設は、熊本市内の国道沿いに位置しており、敷地前の街路樹を借景として取り込むと共に、1階をRC造壁式で立ち上げ2階を木造軸組みで構成しているが、内外装ともに木質仕上げで、2階の床梁は一般流通材の90mm角のスギ材を重ねた透かし梁としているのが特徴である。







その後 14:00 に次の視察地である八代市に移動した。九州自動車道を利用して 1 時間の道のりとなったが 15:30 に 2 カ所目の視察地である「八代市民俗伝統芸能伝承館(お祭りでんでん館)」に到着した。

建築家の平田晃久氏(平田建築設計事務所)が設計した施設で、敷地内に2棟に分棟化された建物は、前後の道路間を小路のように通り抜けることができるように配置されている。また、局面的でうねるような屋根は祭りの躍動感を表し、軒下を見上げるとお祭りの陣笠を組み立てたような木組の屋根架構は一部の大断面集成材を除き、八代産の流通材を使用している。

本施設は市内にある30を超える無形民俗文化財の保存継承と交流促進の拠点として計画されたもので、八代市厚生会館(設計: 芦原義信建築設計事務所)の別館があった敷地に立地している。周囲には「八代市立博物館・未来の森ミュージアム(設計: 伊藤豊雄建築設計事務所)」、松浜軒、図書館といった街なかの名所があり、それらをつなぐ場所に位置している。







1時間20分の視察時間の間に、隣接する「八代市立博物館・未来の森ミュージアム」も見学することができた。残念ながら長期に渡る改修工事のため室内見学はできなかったが、敷地内に入ると芝生で覆われた小高い丘が隆起したような形状の空間を緩やかなスロープで登っていくその上に平屋建ての施設が立地している。丘を登って最初に目に飛び込むのは施設のエントランスホールやカフェなどのオープンスペースであるが実は2階部分で、閉鎖性の高い1階の展示室は

あたかも地下であるかのように盛土によって埋められている部分にあることを知ることができる。視覚的な高さが抑えられたヒューマンな環境を考慮し、建物の威圧感を軽減することに大きな注意が払われたことが理解できる施設であった。







〇2024.12.1 (日)

(ホテル→熊本地震震災ミュージアム→道の駅「阿蘇」駐車場→昼食→道の駅「小国ゆうステーション」→グラスステーション→黒川温泉「べっちん館」座学講習会→黒川温泉旅館泊)

当日は8:00 にホテルを出発、九州自動車道と一般道を経由して9:15 に阿蘇村にある「熊本地震震災ミュージアム」に到着した。本施設は2016年4月の熊本地震で被災した東海大学阿蘇キャンパスの跡地に建てられた地震遺構展示施設で、熊本県が1988年から実施している「くまもとアートポリスプロジェクト」参加事業として公募型プロポーザル(審査委員長:伊東豊雄氏)により設計者を選定しており、最優秀賞を受賞し施設設計を担当したのは大西麻貴+百田有希(o+h)である。

施設内に展示されていた提案書を参考に施設見学すると、基本計画を尊重し「自然の驚異を感じ、体験する」展示学習施設として、熊本・阿蘇の雄大なランドスケープに呼応するため流れるような平屋の緩やかにカーブする屋根をかけることで、地面と水平につながる深い軒下や空と山の風景を切り取る屋根の稜線が見て取れる。また、バリアフリーに配慮しながら敷地を横切るように3つの展示空間を配置することで、駐車場からミュージアムや震災遺構(地表地震断層・東海大キャンパス1号館)へとつながる回遊性が生まれている。構造はW造+RC造(一部S造)で屋根面の小屋組みや内装、家具には積極的に地域産材を使用している。特徴は屋根材にもあった。地元の火山灰や土、砂、石など10種類約6万枚のタイル焼き張り上げることで屋根全体に大きなグラデーションができあがっている。約1時間の施設見学であった。







10:15 に次の目的地である道の駅「阿蘇」に向かった。九州を代表する観光地域・阿蘇の玄関口に位置する道の駅の「駐車場改修」視察である。当初の予定にはなかった視察地で、本日、黒川温泉「べっちん館」での講師を依頼している徳永 哲氏 ((株)ランドスケープむら:代表取締役)の監修による改修後の駐車場は、阿蘇の遠景と敷地周りの近景とが共存し両立するように量感のある緑の樹林帯で包まれていた。また、既存のコンクリート擁壁を築山で覆い、地域で親し

まれている雑木の木立を演出するなど季節感と地域性を取り込んでいる。 10:45 から約30分の視察・休憩の後、早めの昼食(会場:吾亦紅)を取った。







次の視察地の道の駅「小国ゆうステーション」には12:30 に到着した。1987 年に完成した本施設は、当初はバスターミナル「小国町交通センター」として建設された施設であるが、現在は周辺の施設と相まって飲食・お土産品店街のイメージが強い。葉祥栄氏の設計によるもので、形状は円錐台形を逆さまにした形をしており、外装は全面ミラーガラス、中に入ると小径木をボールジョイントでつないだ立体トラスが網の目のように全体を覆い、繊細ながら開放的な木造空間を創り出している。その内・外装のギャップが大きい。林業の町である小国町長からの要請に基づき小径木小国杉の間伐材を利用した「木造立体トラス構法」の木造建築は、今でこそ珍しくないが、当時としては未来を先取りした木造建築への挑戦だったのでないかと感じた。

葉氏は小国・南阿蘇周辺に複数の施設を設計している。約45分の視察の後、木造施設ではないが1993年に葉氏が設計した「グラスステーション」を見学した。現在、ガソリンスタンドに利用されている本施設は、キールアーチによる大胆なコンクリート架構にケーブルを掛け渡し、耐火ガラスで覆うことによって自由曲面を実現した建物である。当時、その自由曲線はコンピュータ解析によって最適な形状を導き出して構造計画いる分けであるが、今日ではコンピュータによるデジタルデザインの草分け的存在として再評価されていると聞く。







13:50 本日の施設見学はこれにて終了である。一路、宿泊先である黒川温泉に向かう。湯めぐりができる「入湯手形」の導入で有名となった黒川温泉郷である。温泉街を散策後、中心部にある休憩施設「べっちん館」で「温泉街の再生」について徳永氏(前出)と当時の旅館組合長の2名の説明を聞いた。

もともと阿蘇外輪山に位置する山間のひなびた湯治場であり、旅館の経営体も 20 数軒の農家 兼業が多かったと言う。1964年にやまなみハイウェイが開通したことで一時的に盛り上がりを見 せたがブームは数年で下火となり多額の借金をかかえる温泉旅館は混迷が続いた。そんな時代で も1軒だけ客足の絶えない宿があった。黒川温泉の父ともいえる後藤哲也氏の経営する「新明館」 であり現在の黒川温泉の骨子となった宿泊施設である。後藤氏のテーマただ一つ「自然の雰囲気」 であり、自然を生かし、客を引き留め、リピーターを確保できる黒川温泉のセールスポイントを 模索したその答えが露天風呂と田舎情緒であった。その上で単独の旅館が栄えても温泉街の発展 にはつながらないと考え、すべての旅館に自然を感じさせる露天風呂の設置を呼びかけたが結果 として露天風呂を造れない旅館も現れた。そのことがヒントとなり、すべての旅館の露天風呂に自由に入ることのできる「入湯手形」を発行し、1983年から入湯手形による各旅館の露天風呂めぐりが実施され多くの観光客を呼び込むキカッケとなった。さらに、これまで温泉街全体で自然の雰囲気を出すため全員協力して雑木林をイメージして木を植え替え、自然景観を阻害する看板約200本を撤去した。その結果、温泉街全体に自然に包まれたような風景が生まれ宿には鄙びた湯の町情緒が蘇ったとのことである。







黒川温泉全体がまるで一つの旅館となるよう見立て、それを表す言葉「黒川温泉一(いち)旅館」は、個々の旅館は「離れ部屋」であり、相互の旅館のつなぐ細い路は「渡り廊下」、温泉街の自然は「中庭」といったように来訪者を地域全体でお客様としてお迎えし、皆が同じ気持ちでおもてなしする。その中で地域の課題を共有し解決していくことで全体の繁栄を目指していくこと。それが「黒川温泉一(いち)旅館」という基本理念とのことである。16:50 までの約 2 時間の講話の後の宿までの帰り道に見た温泉街は、ところどころに明かりが燈り浴衣に下駄で湯めぐりをする観光客でにぎわっていた。

〇2024.12.2 (月)

(旅館→小国町町民体育館(小国ドーム)→南小国町役場→穴井製材所&竹の熊→昼食→由布市ツーリストインフォメーションセンター→大分空港→羽田空港)

8:30 にホテルを出発、本日最初の視察地は「小国町町民体育館」である。昨日に見学した建築家の葉祥栄氏の木造立体トラス構法の集大成とも言える作品で1988 年に「小国ドーム」の名称で親しまれた体育館である。桁行方向56m、梁間方向46mのアーチ状の大架構には5,602 本のトラス材と1,455 個の接点グローブが使われている。延べ面積3,200 ㎡は日本で初めての大規模木造建築である。また、採光計画であるが、床面のクレアを防ぐために直射日光を避け、内部に入る光がすべて反射光となるよう考えられている。約40分の視察であった。







次に南小国町役場に向かった。2015年に竣工した本施設は設計競技(コンペ)により仙田満氏 (環境デザイン研究所)が最優秀者として選定され設計した施設で、執務棟と議場棟からなる役場庁舎である。地場産材の木材を使用することがコンペ時の要件であり、設計・施工と並行して進められた木材の調達から品質管理には多くの専門家が協働で参加しており、ほぼすべての構造 材を町産材で調達している。議場に使用している長さ 10m、径 40cm の磨き丸太の登りトラス梁 は圧巻である。一方、執務室はトラスを組み合わせた木造ラーメン架構による開放的な空間を演出し、ゆったりしたロビーやテラスが連続して広がっている。役場職員に議場案内していただき ながらの約 50 分の施設見学であった。







10:30 に次の視察地である同町内の「穴井製材所」に向かった。1964 年創業の穴井木材工場は、南小国町役場に磨き丸太等を納めた地元の製材所である。この土地で代々受け継がれる小国杉やヒノキを使った建築材の製造・販売を行うほか、自社ブランドの六次化商品の販売も展開している。対応していただいた三代目の穴井俊輔氏が家業を継ぐ傍ら 2023 年にオープンした喫茶「竹の熊」で休息しながら話を伺った。地場産材である小国杉を多用した本施設は山の湧水を引いた水庭を中心とし、高床式の板の間、回廊、喫茶室がそれを取り囲むように配置されている。穴井氏は喫茶店開業の意図を「山を整備し、きれいな水が湧き流れ、田畑を耕し、作物が収穫出る、林業と農業と人々との営みが密接にかかわっている」ことを伝えたかったと話した。確かに、のどかな風景が目の前に広がり訪れた人々に南小国町の風土を感じさせる心安らぐひと時であった。







12:00 に南小国町を出発し、大分自動車道で由布院に向かった。12:50 由布市到着、昼食の後、各自自由散策となり、由布市内の建築巡りを行いながら最後の視察見学地である「由布市ツーリストインフォメーションセンター」を集合場所とした。集合時間は14:30 である。

市内散策の中で多くの参加者が訪れたのが建築家の隈研吾氏が手がけた「COMIC ART MUSEUM YUFUIN (コミック・アート・ミュージアム・湯布院)」である。湯布院の自然と街並みに溶け込む「ムラ」をコンセプトに設計された施設とのことである。本館は外壁には黒いシックな「焼杉」が使われており、ギャラリー内部は黒と白で統一され落ち着いた雰囲気で鑑賞することができる。隣接する新館は屋上で本館とつながり、室内は自然素材や和紙を使った明るい空間が広がる。ガラス張りの2Fラウンジから正面に見える由布岳(1583m)は美しく荘厳で「豊後富士」とも呼ばれている。その屋上には由布岳をバックに奈良良智氏の大型彫刻作品が展示されている。







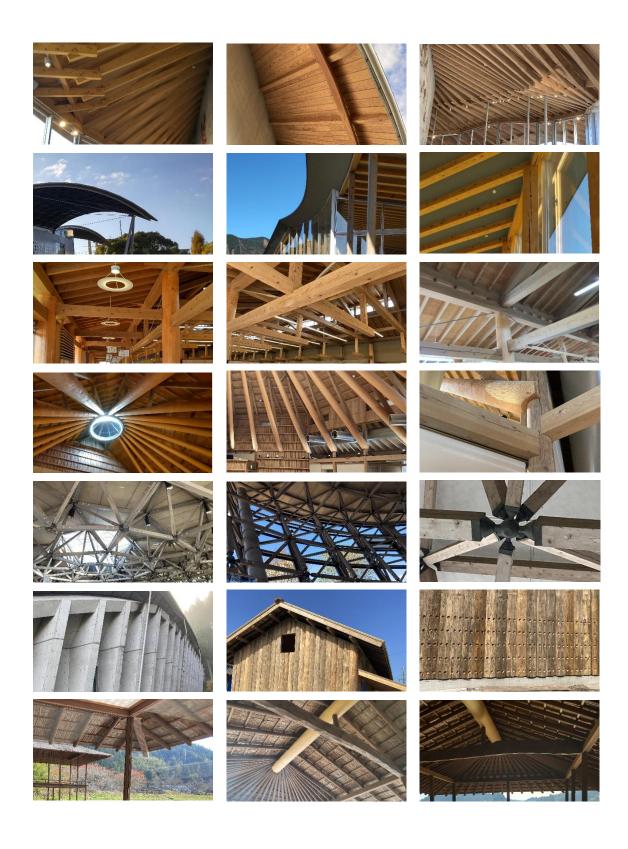
集合時間を気にしながら最終視察施設である「由布市ツーリストインフォメーションセンター」に向かった。本施設は湯布院の旅の玄関口「由布院駅」に隣接していた。建築家の坂茂氏が設計した本施設は、1990年に竣工した「由布院駅」(設計者: 磯崎 新氏)との対比を意識して設計された施設で、アーチが連続するような構造で設計され有機的な温かみを感じさせる木造の曲線が特徴となっている。また、坂氏が災害時の仮設間仕切り等で多用している紙管を館内にある椅子にも使用するなど環境にやさしいデザインが随所に見られた。

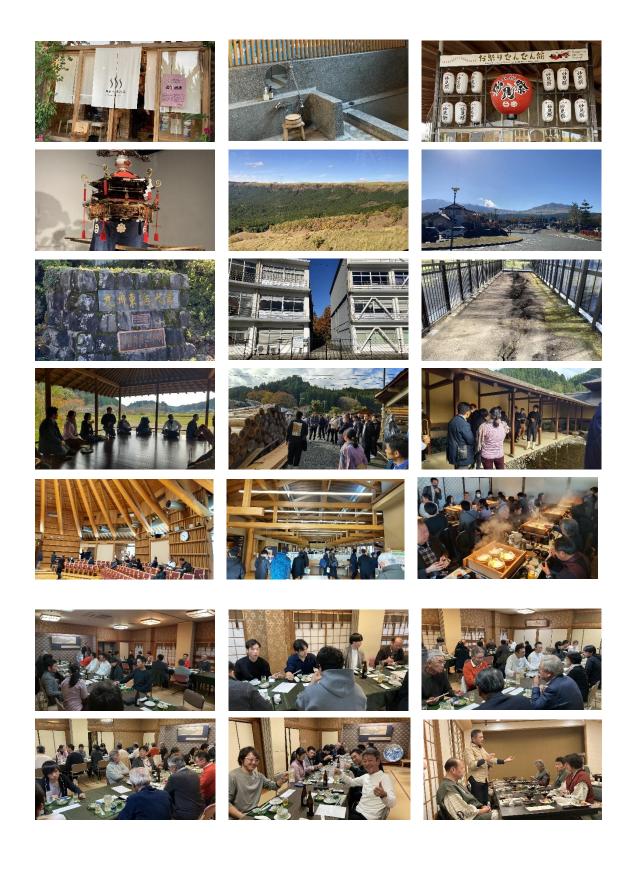






これで、本視察研修の全日程を終了した。大分自動車道を経由し大分空港に到着したのは 15:30 であった。16:55 に大分空港を出発し 18:20 に羽田空港に到着した。その後、羽田空港第 2 ターミナルでの現地解散となった。





2. 研修報告

(報告1)

有限会社イガラシ建築設計室 大波 慶行

県内各地から組合員関係者総勢 30 名(20 事務所)が羽田空港第 2 ターミナルに集まった。 20代~70代の各世代が絶妙な距離感を生んでいた。ここから2泊3日の中で九州木造施設視察 研修を通しながら懇親・交流をはかる旅路がスタートした。

初日は熊本市を経由しながら【お祭りでんでん館(八代市民俗伝統芸能伝承館)】へ。

八代妙見祭は江戸時代から続く秋の大祭であり、2020年にはユネスコ無形文化遺産に登録され ているそうだ。

地場産の木材を使った木加工の3次元曲面の屋根が特徴でお祭りの躍動感をうねる屋根によっ て表現してあり、柱と同じ径の竪樋が施されシンプルさかつ美しさを感じる外観であった。内部 は妙見祭の壁面グラフィックやサインなど細部までのこだわりを感じることができ、展示室では タイミング良く傘鉾の展示と共に三方の壁全面を利用した大画面映像により祭りの臨場感を体感 することができた。



展示棟のうねり屋根



4m以上の笠鉾を組み立てられる大きな軒下空間



笠鉾の展示と展示室



ユニークなサイン

夜になり、本番ともいえる宴。互いの顔と名前が一致していき、懇親・交流も盛り上がる。 八代市は八代亜紀の出身の地ということで知られていることが多いが以前から遊郭があったほど 盛り上がりを見せていたそうだ。現在では夜の街も縮小され、アーケードはシャッター街と化し、 活気が無くなってしまったと御年84歳八代市一筋の【勢い寿司】大将が寂し気に語っていた印象 が強く残った。

2日目は阿蘇郡南阿蘇村にある【熊本地震震災ミュージアム KIOKU】へ。

熊本地震が2016年だったことに時の流れの速さを真っ先に感じた。

震災遺構となった東海大学阿蘇キャンパス、地表地震断層の保存、大規模山腹崩壊(数鹿流崩れ)などと共に経験を風化させず未来へ語り継がれる思いを乗せた KIOKU があった。

敷地高低差をそのままに「東海大学阿蘇キャンパス旧1号館」へと自然に導く動線作りや阿蘇の素晴らしい風景にも馴染んだ圧迫感のない建物だった。

ここは単純に建築物としてだけでなく東日本大震災を経験した身としては再びあらゆる面で考えさせられる視察となった。東日本大震災から13年以上の時が経ち、当時より無意識のうちに防災意識も薄くなりつつある中で順路途中にある言葉一つ一つにも考えさせられ、組合員の日頃の行いのおかげで雲一つない晴天の中、阿蘇の山々に囲まれた壮大な眺めと共に改めて自然の脅威を再確認させられた。



KIOKU と東海大旧1号館と数鹿流崩れ



これでもかという晴天と優しい曲線美



キャンパスを貫いた地表地震断層



感じ方は人それぞれ



切断し保存された東海大学

2日目の宿は九州の三大温泉として親しまれている【黒川温泉】へ。

少子高齢化・集客による危機に直面した30軒程の温泉宿・地域住民と共に旅館協同組合が集落全体の風景が一つにつながる『黒川一旅館』を合言葉に植樹作業・乱立看板の撤去・清掃作業を継続的に取り組み黒川温泉の礎を築いたそうだ。

集落全体で徹底した景観形成のルールにより建物と緑のバランスが取れた温泉街がそこにはあった。



宿泊したやまびこ旅館



緑生い茂る温泉街



喫煙所まで茅葺屋根の徹底ぶり



温泉街中心を流れる田の原川

最終日は黒川温泉に続き日本で最も美しい村の南小国町と小国町の視察へ。

小国町は町の総面積の74%、南小国町は85%を山林原野が占めており、特産の『小国杉』が全国に知られているそうだ。この小国杉の間伐材を生かし9mの磨き丸太を利用した役場や小径木を利用した木造立体トラス構法などを視察した。

言わずもがなの美しさに圧倒されてか体力的な面か足取りがスローダウンしていく。きっと前者であろう。その美しさを写真で振り返る。



小国ドーム



木造立体トラス構法



福島にも日本で最も美しい村は存在する



磨き丸太を使用した議場



木材工場が開業した喫茶 竹の熊



移住してきた若手金髪ギャル職人と施工した箇所もあるとか

私個人としては久しぶりの研修旅行参加となったがこれでもかという程の視察数に圧倒されながらも刺激・自然の中での心地よい疲労・新たな交流と非常に充実した研修旅行となった。

今回の研修旅行を企画、準備・実行して頂いた福島県建築設計協同組合及び関係者・参加者の みなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

1. 神水公衆浴場

■所在地:熊本県熊本市

■設計:西村浩/ワークヴィジョンズ

親子6人家族が暮らす住宅兼公衆浴場である。正面の入り口は木造アーチ状に覆われ、ふと立ち寄りたくなる半屋外空間となっている。

建物の内外部には色合いや触り心地の異なる木材が多数使用され、まさに木の良さを直接感じることができる建築である。また、1階は公衆浴場、2階は住宅という構成となっており、住宅と公衆浴場の玄関は共用され、地域に開かれた兼用住宅となっている。



【公衆浴場と住宅の共用入口】



【木質内装の廊下】



【浴室の木組天井】

2. 八代市民族伝統芸能伝承館(お祭りでんでん館)

■所在地:熊本県八代市

■設計者:平田晃久建築設計事務所

熊本県八代市の代表的な行事である"八代妙見祭"をはじめとした伝統芸能を継承する場として計画された建築である。木造の曲面大屋根(三次曲線)で構成された2つの棟(展示収蔵棟と会議棟)は、屋外の祭り空間を囲むように配置され、お祭りで踊る人々の姿を連想させる建築デザインとなっている。



【外観:曲面大屋根(三次曲線)】



【内観: R C内壁と曲面屋根木組】

3. 熊本地震震災ミュージアム

■所在地:熊本県南阿蘇郡南阿蘇村

■設計者:大西麻貴+百田有希/o+h・産絋設計

平成28年に発生した熊本地震を未来へ伝えることを目的として建築された博物館である。 阿蘇の山並み景観に融合すると共に、なだらかに傾斜する敷地に沿ったランドスケープを意識 した建築デザインである。連続して曲線状に配置された木造柱や軒天ルーバーが建物内部と自 然豊かな外部を緩やかにつないでいる。

敷地北側の小高い場所には、地震で被災した旧東海大学のキャンパスが遺構として保存され、 壊れて露になった柱の鉄筋や変形した窓枠の姿からは地震の持つ力の大きさを見せつけられ る。雄大な阿蘇の美しさと自然の恐ろしさを同時に体感する施設である。



【阿蘇山に溶け込む伸びやかなフォルム】

【被災した旧東海大学のキャンパス】

4. 道の駅小国 ゆうステーション

■所在地:熊本県南阿蘇郡小国町

■設計者:葉祥栄

肥後小国駅の跡地における再開発の一環として建てられた施設であり、日本初の木造立体トラス工法を用いて造られた建築物である。

逆錐の形状と反射率の高いガラスにより構成された特徴的なデザインは小国町のシンボル 的存在となっている。内部は大部分が二層の吹き抜けとなっており、ガラス面から光を取り込 み、明るく開放的な空間を形成している。



【外観:周辺を映し出す反射ガラス】



【内観:立体トラスの屋根・柱・壁】

5. [小国町民体育館(小国ドーム)]

■所在地:熊本県南阿蘇郡小国町

■設計者:葉祥栄

東西外壁がRC柱・壁、南北外壁がガラスカーテンウォール、天井が三次元木造立体トラスにより構成されており、5602本もの小国杉が使用されている。この体育館は、当時制限されていた 3000 ㎡を越える大規模木造建築の安全性を葉氏自らの手で証明することで実現した建築である。

アリーナ中央部の天井に設けられたトップライトからはやわらかな光が差し込み、アリーナ 全体を優しく照らしている。観客席のレベルはやや低く設定されており、コートとの距離が近 く、プレーの迫力を間近で体感できるドーム型アリーナである。







【RC柱・壁とガラスウォールの外観】

【美しい三次元立体トラス屋根】

6. 南小国町役場

■所在地:熊本県南阿蘇郡南小国町

■設計者:仙田満+環境デザイン研究所

地元産の木材の使用が、設計コンペ時からの設計条件として計画された庁舎である。

執務棟は、執務スペースを囲むように町民窓口と通路がめぐらされ、町民優先の開放感と回遊性のある計画となっており、所々にアルコーブ状の休憩スペースが設けられている。

議場棟の大講義室は、頂部から放射状に広がった丸太が講義室全体を包み込み、天井の高い 空間でありながらも落ち着いた雰囲気となっている。



【地域性を表出する建物ファサード】



【豊かでシンボリックな議場棟内部】

7. 喫茶 竹の熊

■所在地:熊本県南阿蘇郡南小国町

■設計者:下川徹/TORU SHIMOKAWA architects

この喫茶屋の創業者である穴井氏は製材所を営んでおり、使用されている木材のほぼすべて に南小国町で育った小国杉が用いられている。

前面道路との高低差を上手に生かした構成が独自の空間を創出し、また周囲の風景を喫茶空間の眺望として上手に取込み、閉じつつも開かれた空間づくりを行っている。





【池越しに喫茶室を見る】

【半屋外回廊からの眺望】

8. 由布市ツーリストインフォメーションセンター

■所在地:大分県由布市 ■設計者:坂茂建築設計

JR由布院駅に隣接した観光客のための観光案内所である。湾曲させた大断面集成材を4本 使い、平面が十字になるY字型の重ね柱の木造架構が意匠的にも構造的に印象的な建築である。 天井を見上げると、波打つような曲線を描くアーチ梁と二次アーチ梁が編むように交差し、森 の中にいるような雰囲気が演出されている。

吹き抜けの観光案内所は、JR由布院駅のプラットホームに面し、互いに借景とすることが 意図されている。2階には「旅の図書館」と名付けられた読書スペースが設けられており、ど こか森の木々に囲まれて読書をしているかのように感じられる空間である。



【JR由布院駅から見た外観】



【JR由布院駅に面した吹き抜けの観光案内所】

付録:ここからは、木造視察の道中で見つけた気になる建築(木造以外)を紹介する。

9. 八代市立博物館・未来の森ミュージアム

■所在地:熊本県八代市

■設計者:伊東豊雄建築設計事務所

八代市民族伝統芸能伝承館の道向に建つ、伊藤豊雄氏の建築作品である。旧八代城主である 松井家が所蔵する美術品を中心に、八代の文化と歴史を紹介する博物館である。小高い丘の上 に建てられた博物館は、地中に展示室を埋め込むことでボリューム感を緩和し、メタリック調 の外観シルエットと波形状のステンレス屋根が特徴の建築デザインである。

残念ながら、改修工事中のため内部を見学することができなかった。





【緑の丘に埋め込まれた建築ファサード】

【連続するボールト屋根・シリンダー状の機械室】

10. グラスステーション

■所在地:熊本県南阿蘇郡小国町

■設計者:葉祥栄

国道 212 号線沿いに建ち、ひと際目にとまるガソリンスタンドである。前出の道の駅小国 ゆうステーション、小国ドームの設計者である熊本市出身の建築家・葉祥栄氏の作品である。 コンクリートのアーチとガラスのシェルによって覆われた斬新とも言える建築である。 また、斜めに上がる特徴的な階段とそこから上がる屋上部分の利用目的が非常に気になる建築である。



【沿道からの外観】



【斜めに伸びた階段】



木の素材としての特徴に「香り」がある。これは、コンクリートや鉄よりも際立つ特徴だ。また、建築において「香り」という視点から、空間の質が語られることは少ない。

今回は、視察した熊本の木造建築群や、豊かな自然環境を巡る中で印象に残った「木の香り」、 そして、薄れゆく過去の時代の記憶の中に残された「時の香り」について、拙筆ながら記したい と思う。

【神水公衆浴場】

交通量の多いバイパスに面して、銅色の金属屋根に覆われてひっそりと佇む建築だ。アイレベルの外壁がスギの鎧張りで、鉢植えが置かれた軒下空間は、街に木の温もりや緑の香りをお裾分けする細やかな中間領域となっている。中に入るとバイパスの喧騒から離れ、銭湯ならではの湿っぽさと、スギ、ヒノキの優しい香りが心と体を包んでくれる。洗い場の人造石研ぎ出し仕上げは、立ち上りの曲面が滑らかで指でなぞりたくなる。足触りも心地良い。限られた空間の中で狭さを感じさせない工夫が随所に見られた。男女風呂の中間にある、見る向きで絵が現れるギザギザ壁もその一つであろう。子供から大人まで、楽しく湯船に浸かる情景が目に浮かぶ。

熊本地震を経験し、入浴に困っている人を助けたいと、自家用も兼ねる風呂を地域に開放する という大胆さ。施主の真心が空間全体から伝わってくる。凝縮された空間に、優しい香りを感じ る建築であった。



内部から連続する透かし重ね梁の軒下空間



洗い場と目で楽しめるギザギザ壁

【熊本地震震災ミュージアム】

阿蘇の雄大な外輪山を臨む、伸びやかな建築だ。雄大なランドスケープの前に佇むと、周囲に 広がる草原と、火山灰が堆積した阿蘇特有の乾いた香りが風に運ばれて来た。展示空間はスギ、 ヒノキの軸組構造で、大らかで、明るい陽光に満たされ、温かな太陽の香りがした。まさに、今、 自分が生きていることを肌で実感する空間だ。

一方、隣接した高台にある震災遺構の東海大学阿蘇キャンパスは、せん断崩壊したRC柱と鉄骨ブレースで補強された空間が痛々しかった。被災して傷ついた建物は、灰色で冷たく、ガラスが

飛散し、香りが無かった。地表に現れた断層は、薬剤により固形化され、風化しないように保存されていた。

時が未来へと向かう「生」の空間と、震度7の揺れが2度も襲来し、時が止まった「死」の空間との対比を、香りの違いで感じたミュージアムであった。



阿蘇の大地の香りを感じたランドスケープ



太陽の香りを感じた展示空間



被災した東海大学阿蘇キャンパス



薬剤により固形化され保存された断層

【黒川温泉】

集客に危機を感じた旅館組合の熱意と、温泉地の修景に対する一連の取組みに感嘆した。新明館の当主である後藤哲也氏を筆頭に、2000年初頭から看板の統一化や植樹、温泉地全体の雰囲気作りが展開された。徳永哲氏との連携も欠かせない。周辺の植生を活かし、時間をかけて固有のランドスケープを生み出した。駐車場と路地を隔てる植栽もその一つだ。

阿蘇特有の鼻を突く硫黄泉の香りと、植樹された瑞々しい広葉樹の香りが、近くを流れる川を 伝って流れてくる。温泉街は、夜になると風情が増した。暗くなることで嗅覚や聴覚が研ぎ澄ま されたからであろう。家紋が描かれた行灯の明かりを頼りに、路地を巡り、外湯も楽しませても らった。旅館が部屋で、路地が廊下という見立ての通り、温泉街が1つの大きな旅館となった。

先人の思いと、それを引き継ぐ者の有形無形の弛まぬ努力によって、癒しと、もてなしの香りが漂う、海外からも愛される温泉街がそこにあった。



外湯探しが楽しくなる旅館の家紋が描かれた行灯



駐車場と路地を隔てる植栽帯



川沿いに流れてくる硫黄泉の香り



後藤哲也氏が当主であった新明館

【キャバレー・ニュー白馬】

八代市出身で昭和の歌姫と言えば八代亜紀。昨年12月に、惜しまれつつ亡くなった彼女が15歳の時に歌手として雇われたのが、キャバレー・ニュー白馬だ。日本に現存する最後のキャバレーと言われ、まさに昭和の「時の香り」が漂う上質な空間だった。入口では、先ず、八代のドレス展示に迎えられる。深紅の絨毯と金メッキの優雅な手摺の階段で地下に降りると、左手にはシックなカウンターバー。右手には夕焼け色に染まったステージと生演奏用のバンドセット。両サイドに裸電球で装飾された回転柱。ハイバックソファーはコの字に配置され、周囲の視線を程よく遮り、同時にステージの生バンド演奏を捉える集音装置となった。ここに八代の美しいビブラートが響けば、虜にならない人はいないであろう。

しかし、偶然取材に来ていた地元新聞社の記者によれば、後継者不足という課題が、この建築の存続に影を落としている。話題性から、県外からの来客が増えていることが明るい兆しではあ

るそうだ。八代亜紀という記憶、そして、キャバレーという夜の社交場としての日本文化の記憶の「残り香」を絶やさないよう、新たな知恵が求められている。



White Horse のネオン



八代亜紀のドレス展示



夕焼け色のステージとハイバックソファー



シックなカウンターバー

7

福島県建築設計協同組合

行き先 九州木造施設視察研修3日間

| 宿泊場所 | <八代市内> ホテルルートインハ代 〇朝食付:シングルルーム | | | <黒川温泉> やまびこ旅館 ○夕・朝食付 ○4~5名1部屋 | | *新白河駅下車の場合 やまびこ221利用 東京駅新白河駅 20:56 22:15 | | | | |
|------|--|---|---|--|--|--|--|--|---|---|
| 行 程 | *1 福島駅—<やまびこ202>—都山駅—新白河駅—東京駅—<山手線>—浜松町駅—<モノレール>—羽田空港第2 6:33 6:47 6:59 8:14/8:33 8:39/8:50 | しわき駅—<ひたち2>—湯本駅—泉駅—の来駅—品川駅—<京浜急行>—羽田空港第1・第2タ-ミナル駅 5:55 6:04 6:13 8:48/9:03 9:25 羽田空港第2タ-ミナル—SNA13→熊本空港== 神木公衆浴場 ==御船IC==<九州HW>==八代IC== | 10:35 * *機内弁当 12:35 13:30~14:30 == <mark>八代市立民俗伝統芸能伝承館</mark> ==八代市内(泊) *「日本料理 葵」にて個室宴会場での会食 18:00~ 15:30~16:50 16:55 | ホテル==八代 IC=<九州HW>==益城熊本空港 IC== <mark>熊本地震震災ミュージアム==吾亦紅</mark> (昼食)== 8:00 11:25~12:10 | == 道の駅小国ゆうステーション ==黒川温泉(泊) *温泉街散策後「 ベっちん館」にて講習会 宴会場での夕食18:30~12:20~13:00 13:20 13:20 | ホテル ==小国町民体育館(小国ドーム)==南小国町役場(視察)==六井製材所(視察)・竹の熊 (喫茶利用)== 8:30 8:45~9:30 9:40~10:35 10:40~12:00 | = 九重 IC=<大分HW>==湯布院 IC== <mark>湯布院 神楽</mark> (昼食)== <mark>由布市ツーリストインフォメーションセンター</mark> == 12:50~13:40 13:50~14:30 | =湯布院 IC=<大分HW>=大分空港—SNA96→羽田空港第2ターミナル 15:30/16:55 18:20 | *1 羽田空港第2ターミナル駅—<モノレール>—浜松町駅—<山手線>—東京駅—<やまびこ69>—郡山駅—福島駅 19:20 19:42/19:51 19:42/19:51 | 羽田空港第1・第2ターミナル駅—<京浜急行>—品川駅—<ひたち29>—勿来駅—泉駅—湯本駅—いわき駅 19:31 19:31 23:12 23:19 |
| 播日 | | н | | 1 | п | | 15 | 町 | | |
| 月日 | | 11/30 | | 9 | 12/1 | | | 12/2 | | |
| | | - | | | N | | | ო | | |